

# 郷土愛 土産菓子で表現

時は幕末。外国船に対する防備目的で東京湾内に「台場」が数多く設けられた。中でも

有名なのが東京・お台場だが、横浜市神奈川区沖にも勝海舟が設計した台場があったことは意外と知られていない。その神奈川台場を知ってもらおうと、台場の形をモチーフにした菓子「勝サブレ」を販売するなど、地元・横浜の名所などをあしらった菓子を製造し、観光土産として人気を集めている。

創業は1962年。当時、

## 三陽物産

(横浜市中区)

まだ珍しかったケーキを、喫茶店などに納入していた。現

社は知らなくても、ホテルのケーキビュッフェなどで、口

在も横浜の老舗ホテルにケーキを販売しており、「うちの会

にしている方も少なくないはず」と、3代目の山本博士社長(41)はほほ笑む。

横浜観光土産菓子にこだわっているのは、地元・横浜への思いからだ。「おいしいだけではなく、食べた人が横浜に行きたいと思える菓子を作りた」と話す山本さん。食べた人に読んでもらおうと、勝サブレなど一部の菓子には、横浜の歴史などを記した小冊子を入れていく。

モンテローザの屋号で知られる。社員約100人。象の鼻パークと山下公園の「インド水塔」をテーマにした菓子「象の鼻物語」や、県庁や横浜税関などをテーマにした「横浜三塔物語」など、横浜土産菓子は数十種類にも及び、横浜の主な観光スポットなどで販売されている。



JR桜木町駅近くの小学校に通い、桜木町や関内周辺が遊び場で、横浜に残る昔ながらの物に触れるうち、気が付けば横浜の歴史や文化にのめり込んでいた。横浜で窯を開き、明治期を代表する陶工の宮川香山の作品にほれ込み、作品を展示する「宮川香山真鸚ミュージアム」を昨年、横浜市神奈川区栄町にオープンさせたのも、「子どもたち

に、横浜で創造力あふれる作品が生まれていったということを知ってほしい」からだ。

アメリカで真鸚焼の作品を探している時、偶然見つけたのが、現地の古書店が所有していた古写真。一目見て「神奈川台場」を写したものと直感し、すぐに購入した。専門家に見てもらったところ、神奈川台場の写真と確認され、勝サブレ誕生のきっかけとなった。

商品は、「勝」の字が縁起がいいとして、受験生にも人気だ。甲子園予選の応援用としてや、勝海舟の子孫から贈答用に注文を受けたことも。「結局、台場は実戦には使われず、祝砲を撃つ場所として使われた縁起の良い場所」と話す山本さん。勝サブレには、人生に祝砲をとの思いも込められている。

(佐藤千尋)

きらり  
企業

横浜への思いを込めた自社の菓子を手にする山本社長